

不埒な社長のゆゆしき溺愛

Yuki & Junichi

佐々千尋

Chibiro Sasa



エタニティ文庫

目次

不埒な社長のゆゆしき溺愛

5

書き下ろし番外編 旦那様の特権

345

不埒な社長のゆゆしき溺愛

1

太陽が西にかたむき、街並みの向こうへと消えかかっているその時。

まだ空に残っている陽光と、群青色の夜空が混じり合うのを、私はぼんやりと眺めていた。

いま私がいる広場は「児童公園」という名前だけど、子供たちの遊ぶ姿はない。だいたい前に十七時を知らせる鐘の音が響いていたから、子供たちはみんな帰ってしまったんだろう。

公園には、ベンチに座る私と連れの男、飲み物を手にした休憩中らしきサラリーマン、それにウォーキングをしている年配の女性だけだった。

私の隣に座っている彼氏は、ここで顔を合わせた時から、なにかをこまかすようにどうでもいい話を延々と続けている。弱々しいしゃべり方は、蚊の羽音並みにうつつうしかった。

三週間前に付き合い始めたばかりの彼が、今日ここに私を呼び出した理由は薄々わ

かっている。

告白してきた時には期待で輝いていた男のまなざしが、デートを重ねるたびに力を失っていくことには、とつくに気づいていた。

でも、別れ話くらいビシッと決められないもんな、まったく。

情けない態度の男を見つめて、私は溜息を吐いた。

「……で、結局、なにが言いたいわけ？」
呆れながら呟く。

私が怒っていると思っただのか、男は怯えたようにビクッと身体を震わせた。

「いや、ええと、つまり……僕たちは少し距離を置いたほうが、いいのではないかな、と、思っています……」

「は？」

「だ、だから、その、価値観の相違が……」

男はしどろもどろに言い訳するばかりで、決定的なことは言わない。

そんな彼の態度を見ていたら、私のイライラが限界を突破して、理性という名の鎖が派手にちぎれた。

「まったく、それでも男なの!? なんで『別れてくれ』の一言も言えないのよっ!」

「ひいっ」

「こっちだって、あんたみたいな女々しい男はお断り。とっとと帰って、二度と顔を見せないでね」

フンと鼻であしらって、公園の出入り口に向けて顔をしゃくろる。

話が決着したことにほっとしたのか、男は一瞬、安堵の表情を浮かべて立ち上がった。「それじゃあ行くけど、虎尾さんはもう少しおとなしくするべきだと思うよ。ただでさえ、夕葵なんて男みたいな名前なんだし、見た目が可愛くてもその性格では……」

自分のことを棚に上げて、私の欠点をあげつらうとは、本当にいい度胸をしている。その昔、派手にグレていたという両親直伝の睨みを利かせると、男はか細く叫んで飛び上がり、そそくさと去っていった。

男の姿が見えなくなったのを確認して、私は思いっきりベンチにこぶしを打ちつける。「あー、もう！ そんなの、いまさら言われなくなつて、わかっているっていうのっ!!」心のなかに溜まった不快な感情を声に出し、はあっと息を吐いた。

少し離れたところにいるサラリーマンが驚いた様子でこつちを見ているし、ウォーキングしていた女性は私を避けるようにどンドン離れていって。

全然関係ない人たちを、びっくりさせてしまつて申し訳ない。私は内心で謝りながら、うなだれた。

付き合つて三週間の、手を繋いだこともない男にふられたからといって傷ついたりはない。でも、また、ふられ記録を伸ばしてしまつたことには落ち込んでいた。もう六回目……か、七回目？

自分でももう覚えなほど、私は男性と付き合つてはふられることを繰り返している。

理由はいつもいっしょで「見た目からは想像できないほど性格が男っぽくて耐えられない」というものだった。

私は、二十三歳だと言うと驚かれるくらい童顔で、しかも背が低い。仕事柄、室内にすることが多いので肌が白いし、まっすぐな黒髪を背中まで伸ばしているから、おしとやかな大和撫子に見えるらしい。

人間は見た目じゃなくて中身だ、なんて言うけど、外見だけで相手を判断する人って意外に多いもの。

ついさっきまで彼氏だった男もそう。友達の日那さんの後輩だった彼は、友達といっしょにいた私を偶然見かけて、一目惚れをしたという。

だけど、プロレス観戦が趣味で、筋骨隆々のたくましい人が好きな私にとって、ヒョロヒョロで弱そうな彼は全然タイプじゃなかった。

告白されるたびに断り続け、私の性格が見た目に反して男勝りだということも説明した。けど、相手はしつこくて……結局、ちょっとだけ交際してみようという話になっ

たのだ。

だめになる可能性が高いとわかっていながら付き合うなんて、自分でもバカだと思う。でも「どんなきみでも好きになる自信がある」とか何度も言われているうちに、もしかしたらうまくいくんじゃないかと期待してしまった。

まあ、結果的にふられたわけだけど……

ベンチに座ったまま、膝の上に肘をついて、顎を手で支える。気づかない間に口から長い溜息がこぼれていた。

「……もう少しおとなしく、なんて、できるならとつくにしているよ……」

元カレが残した捨て台詞を思い出して、誰にもなく呟く。

青春時代によくない意味で名を馳せたらしい元ヤンの両親と、やんちゃな兄四人に囲まれていたせいで、私は子供の頃から勝気だった。

それどころか、中学に進学するまでは、兄たちのような男になりたいと本気で願っていた。

自分のことを「オレ」と言い、髪を短くして、兄のおさがりを着ていた私は、女の子らしさがまるでなく……

「ユウキ？」

ふと、誰かに名を呼ばれた気がして、顔を上げる。

逃げ去った元カレが戻ってくるはずはないから、ただの気のせいだろう。でも、いまの状況に不思議な既視感を覚えた。

以前、この公園で、誰かに声をかけられたことがある……ような？

おぼろげな記憶のなから、ひとりの少女の顔が浮かんでくる。白い綿シャツに、赤のショートパンツを穿いた彼女は、幼い私の前に立って柔らかなにかんでいた。

「……ああ」

忘れかけていた思い出が一気に蘇る。

あれは小学三年生の春。小さな冒険心を満たすために、私は家から離れたこの公園へやってきた。そして彼女と出逢った。

「アカネ」

もう会うことができない少女の名を、吐息に乗せてささやく。

どうしてすぐに思い出さなかったんだろう。彼女といっしょにいた時間はとても短かったけど、私にとっては大切な親友だったのに。

そっと目を閉じ、過去へと思いを馳せる。少し湿った夜風に乗って、ひとつ向こうの通りにある踏切の音が聞こえてきた。

——そう。十四年前。あの時も、この音を聞いた。あれが秘密の冒険の始まりだった。

ものすごい風を巻き上げて電車が通りすぎていくのを、踏切の前でじっと見つめる。やがて、けたたましい遮断機のサイレンが止まり、目の前のバーがゆっくりと上がっていった。

口のなかに溜まっていた唾つよをぐくりと呑み込んで、一歩踏み出す。

先月買ってもらったばかりの自転車を押して踏切を渡りきり、ほうつと息を吐いた。

『なんだ、どうってことねーや』

緊張していたことをごまかすために独り言を漏らして、自転車に跨またがる。ここから先は自分の通う小学校の学区外で、高学年になるまで、ひとりではいけない決まりになっていった。

つまり、三年生の自分が行っている場所じゃない。

大人が作ったルールを破っているというそわそわした気持ちと、知らない場所をひとりで探検しているという興奮が、胸をドキドキさせていた。

お気に入りの稲妻いなずまラインが入ったヘルメットをかぶり直して、ペダルを踏み込んだ。

流れていく景色のなにかもが、ピカピカで珍しいものに見える。なんだか自分が急に大きくなったような気がした。

……でも、しばらくそのまま大きな通りを行ったりきたりしているうちに、飽きてしまった。

初めは格好よく見えた街も、実際は普通の店とビルが並んでいるだけなんだから、当たり前だ。

『誰かクラスのやつを連れてくればよかったかなあ』

思わず口から漏れた弱音に、ブルブルと首を横に振る。そんなことをしたら、秘密の冒険じゃなくなってしまう。

でも、意味もなく自転車に乗っているだけではつまらない……

もう少し遠くまで行くか、それとも家のほうに戻るかを悩み始めたところで、どこからか子供たちの騒ぐ声が届いてきた。

はやし立てているような声のあとに、わあっと笑いが起こる。

声がるるほうに向かうと、そこは広めの児童公園だった。

柵さくに囲まれた広場のなかに、滑り台すべ、砂場、ブランコ、シーソーが設置されている。

奥にはベンチとトイレがあって、その横の砂地ではボール遊びができるようだ。

いまでも、高学年らしい男子が四人、サッカーボールを持って集まっていた。さつき騒いでいたのは、あいつらだろう。

公園の端に自転車を停めて、家から持ってきた水筒に口をつける。特別に入れてきたオレンジジュースが、甘酸っぱくっておいしい。

一気に半分くらい飲んで、水筒を自転車のカゴに戻す。もう一度、広場を見ると、

サッカーボールを持ったやつらは、まだ真ん中に寄り集まったままでなにかをしていた。よく目を凝らして見れば、円陣を組むように立つ男子のなかに、もうひとり、背の低いやつがいる。まわりを囲んだ男子はひそひそとなにかをささやいては、笑い声を上げていた。

なんだか、嫌な予感がする。

やつらに気づかれないようにそっと近づいて、隙間から円陣のなかを覗く。

すると、おろしたてみたいな真っ白のシャツに赤いショートパンツ姿のチビが、両手で顔を覆い隠して、うつむいていた。

あれは……泣いてるのか？

着ている服が可愛らしいし、髪を顎のあたりまで伸ばしているから、あのチビだけは女子なんだろう。男子が大人数で女子ひとりを取り囲み、泣かせているなんて、胸糞悪くて吐き気がした。

『お前ら、なにやってんだよ？』

わざと大声で呼びかけて、一気に近づく。全体を見渡して睨むと、男子のなかで一番でかいやつが振り返った。

『……なんでもいいだろ。誰だか知らないけど、関係ないやつは口出すな』
見た感じ、このノツポがリーダーなんだろう。

その自分の予想を証明するように、取り巻きどもが『そうだ、そうだ』『ジュンに逆らうと、ひどい目に遭うぞ！』と騒ぎ出した。

外野の騒音は無視して、ノツポと睨み合う。わざと相手を煽るように、フンと鼻で笑ってやった。

『関係なくたって、弱い者いじめは無視できねーな。オレはお前らみたいなクズとは違うんだ』

『なんだとっ？！』

はつきりとバカにされて、顔を真っ赤にしたノツポが怒鳴る。向こうが威嚇するようになおしを握り締めたのを見て、さらに一步近づいた。

『そんな小さいやつを大勢で囲んでいびるとか、マジで格好悪い。お前、背はでかくても情けねーのな』

もっと相手を怒らせるべく攻撃する。

ノツポはあからさまな悪口に我慢しきれなくなつたようで、ブルブル震えながら握つた右手を高く振り上げた。

『このっ……黙れ！ 生意気だぞっ!!』

本気でキレたらしいノツポは、声が裏返るくらい強く叫んで、こっちに向かって腕を振り下ろす。

たぶん、狙いは左肩だ。でも、やすやすとやられるつもりはない。素早く身体をひねって、かぶったままのヘルメットをノッポのこぶしに当ててやった。

『あーっ、いてえ！』

ノッポの泣き言と、ゴツンという鈍い音が重なる。やつは『痛い、痛い』と喚きながら、うしろにひっくり返った。

素手でヘルメットを殴りつければ、痛くて当然だ。しかも自分から手を出したんだから、完全な自業自得。

ノッポは痛みに弱いのか、ひいひい言いながらすすり泣いている。

そのうち、我に返った取り巻きのひとり、『帰って冷やしたほうがいい』と言出し、全員でノッポをかかえるようにして帰っていった。

ただ突っ立ったまま、ノッポたちが遠ざかっていくのを見送る。

とりあえずノッポのほうから手を出させてケンカに持ち込み、取り巻きもまとめて返り討ちにしてやろうと思っていたけど、そうなる前に決着してしまった。

あっけない終わり方に、少しだけ納得がいかない。

……まあ、大ゲンカしたことがバレルと母ちゃんに怒られるから、よかったと言えばよかったんだけどさ。

どうにもすすきりしなくて唇を尖らせていると、目の前に小さな手のひらが差し出さ

れた。

『あの……大丈夫？ どこか痛い？ もし怪我をしているなら、誰か呼んでくるけど』

『いや、平気……』

首を横に振って『大丈夫だ』と答えながら顔を上げる。すると、さっきまでノッポたちに囲まれていた女子が、心配そうな表情をしていた。

うわ、すつげえ可愛い……！

最初に見た時は手で顔を隠していたからわからなかったけど、目の前の女子は人形みたいに綺麗だ。

思わず見惚れてしまう。じっと見すぎたせいで、女子が不思議そうに首をかしげた。

『本当に大丈夫？』

『お、おう！ バッチリだ！』

ハッと我に返り、大きくうなずく。どこも悪くないことを証明するために、その場で思いつきり跳ねてみせた。けど、勢いがつきすぎて前に倒れそうになった。

慌てて足を踏ん張って、なんとか身体を支える。その姿が格好悪かったからか、女子がプツと嘔き出した。

笑われるのは恥ずかしいけど、彼女が笑顔になったのは嬉しい。

『へへっ。ちょっと調子に乗りすぎた。ところで、お前こそ大丈夫か？』

見たところは大丈夫そうだけど、あの男子たちに乱暴なことをされてたんじゃなかと心配になる。

女子はさっきまでのことを思い出したのか、つらそうに顔をしかめる。でも、すぐにまた微笑んで、こくりとうなずいた。

『うん。助けてくれてありがとう。えーと、きみは……』

とまどう女子を見て、自分の名前を覚えていなかったことに気づく。

『オレはユウキ。踏切の向こうの小学校に通ってる。お前は？』

『あ……、アカネ……』

『そっか。なあ、アカネ、オレと友達になってよ。オレ、今日初めてここにきてヒマなんだ。夕方まで遊ぼうぜ！』

『えっ』

アカネはすごく驚いたみたいに、目をまん丸にしている。

なにかまずいことを言ったのかと思って考えてみたけど、よくわからなかった。

『……えーっと、なんか、ごめん。無理だったらテキストにぶらついて帰るからさ。気にすんなよ』

最後にニカッと笑って、うなずく。

せつかくきたのにもう帰るのはもったいない気がするし、アカネと遊べないのも残念

だけど仕方ない。きつとアカネには用事があるんだろう。

けれど、別れの挨拶のあとに、またいつか会えたら遊ぼうと続けようとしたところで、アカネがブルブルと首を横に振った。

『う、ううん、無理じゃないよ。大丈夫。急に「友達になって」って言われたから、びつくりしちゃって。……実は、転校してきたばかりで、まだ友達がいらないから……』

『へえ！ つてことは、いま、アカネの一番の友達はオレ？』

アカネは一瞬きよとんとしたあと、嬉しそうにふんわりと笑った。

『うん、そうだね。ユウキが一番の友達だよ』

こんなに可愛い子の一番の友達になれるなんて、ちょっといい気分だ。クラスのやつらに自慢したくなる。

秘密の冒険に出た先で悪いノッポたちをやっつけて、お姫様みたいに可愛いアカネを助け出した。まるで自分が正義のヒーローになったようで誇らしい。

なんだかすごく嬉しくなって、自分の手をアカネの前に差し出した。

『握手しようぜ。オレ、お前のこと気に入った！ 今日からオレたちは親友だ。ずっといっしょにいような！』

『あ……うん』

おそろのおそろって感じに出されたアカネの手を取り、キュッと握り締める。その手は

細くてサラサラしていて温かかった。

夜の公園のベンチに座って昔を思い出していた私は、静かに自分の手を見つめる。あの時、触れたアカネの温もりが蘇り、そっと手のひらを胸に当てた。

この場所ですれ違ってから、私とアカネはすぐに打ち解けて、親友になった。

ほぼ毎日、学校が終わったあとここに来て、暗くなるまでアカネと共に過ごした。

おとなしくて優しいアカネが、またノッポたちにいじめられないよう、私はケンカのコツや逃げ方を教えた。アカネは勉強が嫌いな私に宿題を教えてくれた。

ふたりの性格はまったく違っていたけど、それぞれの弱いところを補い合うような、最高の友達だった。

ずっと友達でいたい。できるだけ近くにいるアカネを守ってあげたい。そう思っていたのに……

一学期の終業式の日。別れは突然訪れたのだ。

私は家で昼ご飯を食べたあと、いつものように公園へきてアカネを待っていた。けど、やってきたのはノッポだった。

ノッポは『アカネがまた引越すことになったらいい』と言い、彼女から預かったという手紙を持ってきた。

ひたたくるようにして受け取った手紙には、私に対する感謝と、急に引越してしまふことを謝る言葉だけ。引越す理由や、新しい住所、電話番号もなかった。まるで探さないでほしいとでも言うように。

いま思えば、そうしなければいけないにか特別な事情があったんだろう。でも当時の私は幼くて、アカネに裏切られ、捨てられたような気がした。

あとに残ったのは、もう二度と会えないという事実と悲しみだけ。つらい思い出を消すように、私はアカネのことを少しずつ忘れていった……

そこまで考えて、ふふっと口から笑いがこぼれる。彼氏にふられてへこたれて、思い出したのが友達との別れだなんて、おかしいな感じた。

「……でも、まあ、悪くはないかな」

自分に向かって呟いて、勢いよく立ち上がる。

アカネの前で跳ね上がった時ほど力はいれなかったけど、パンプスの踵が砂にめり込んで、少しよろけた。

誰も見ていなくても恥ずかしい。私は乱れたスカートを素早く直して歩き出した。

何度ふられたって気にしなければいい。諦めないでがんばれば、いつかきつと素敵な相手に出逢えるはず。

……アカネみたいに気の合う、私の全部を受け入れてくれる人に。

公園の出入り口にきたところで、私は視線を感じて立ち止まった。まるでアカネに見つめられているような、不思議で優しい感覚。たぶんそれは、楽しい思い出に浸^{ひた}っていたことからくる錯覚^{さくかく}だろう。

「もう、平気だよ」

心のなかで幼い日の自分とアカネにそう宣言して、また歩き始める。きつと、大丈夫。

根拠はないけど、すべてがうまくいくような気がして、私はそつと微笑^{ほほえ}んだ。

「そういうえば、夕葵。あんた、また彼氏にふられたの？」

彼氏との別れ話から一週間後の夜。穏やかな夕食タイムをぶち壊すように、お母さんが爆弾を投下した。

思わず飲んでいたお茶を嘔き出すと、お母さんは完璧に厚化粧した顔をしかめて、手元の布巾^{ふきん}を投げてよこした。

むせながら布巾をキヤッチして、テールと自分の上着を拭^ふく。そして、なんとか呼吸が落ち着いたところで、お母さんを睨^{にら}んだ。

「ちよつと、それ誰から聞いたのよ!？」

同居している家族とはいえ、いちいち「男と付き合つてすぐ別れた」なんて報告はし

ない。

別に知られて困る話じゃないけど、なぜバレているのか疑問だった。

お母さんはさも当然のように、向かいの席の兄ちゃんへ目を向ける。私とお母さんの視線を受けた兄ちゃんは、真顔でテレビのお笑い番組を見ながら首を横に振った。

「ふられたとは言っていない。ただ、ここ一ヶ月近く続いていた毎晩の『おやすみコール』がなくなったのと、仕事が休みなのに引き籠^{こも}もつて出かけないところから考えて、別れたんじゃないかと推測して話しただけだ」

名探偵にでもなったつもりか、兄ちゃんは少し自慢げに推理を披露^{ひろう}した。

「って、なんで毎晩、電話がかかってきてたことを知ってるのよ!」

元カレからの電話は自分の部屋で受けていた。話の内容はいつもどうでもいいことばかりだったけど、他人に聞かれるのはプライバシーを侵害されているようで嫌だ。

私が嘔みつくと、兄ちゃんはあからさまに不愉快だという表情を浮かべる。それから、その神経質すぎる性格を表したようなインテリメガネを、ぐいっと押し上げた。

「知りたくなくても、お前の声がかすぎてなにかも筒抜け^{つつぬめ}だ」

「嘘っ!？」

衝撃の事実^{じじつ}に声が裏返る。

恥^はずかしいと思う間もなく、お母さんが「で、結局ふられたんでしょ?」と畳^{たた}みかけ

てきた。

違うと言いたいけど、見栄を張っても仕方ない。

しぶしぶうなずく私を見て、お母さんが呆れたように、はあつと息を吐いた。

「まったく。いくら貧乳だとしても、彼氏ひとり捕まえておけないなんて情けないこと。いままで付き合っただけの人を集めたら野球の試合ができるんじゃないの？」

「そんなわけないでしょ！　む、胸の大きさは関係ないし。それに、えーと……まだ六人目だよ」

本当はもっと多いかもしれないけど。

私の心の声を聞いたみたいに、兄ちゃんが「お前のことだから正確な人数なんか覚えていないだろう」とつつこんでくる。

なにか言い返してやりたかったけど、うる覚えなのは事実だから、睨むだけにしておいた。

お母さんは箸で味噌汁をぐるぐる掻き混ぜながら、わざとらしく溜息を吐く。

「……ホント、うちの子供たちはどうなってんのかしら。五人も産んだのに結婚しているのがひとりだけなんて……。あー、くそっ、アタシは早く孫が見てえんだよっ！」

愚痴をこぼしているうちに興奮してきたらしく、お母さんの口調が急に荒くなる。

アンチエイジングに命を懸けて、分厚い猫の毛皮をかぶっているお母さん。近所の人

たちからは「いつも若くて綺麗で上品な奥様」なんて言われているけど、中身は元ヤンでガラが悪い。

いまみたいに機嫌を損ねると、手がつけれられない暴君と化するのだ。

お母さんは手のひらをパンツとテーブルに打ちつけ、ギラギラした目を私に向ける。

もう慣れているから怖いとは思わないけど、早く話題をそらさないとさらに面倒なことになるのはわかりきっていた。

「ま、孫って言われても、私まだ二十三で、仕事はアルバイトだし。そういうのは普通、ちゃんと就職してる大人の兄ちゃんたちが先でしょ」

我が虎尾家は、建設会社を経営している父と専業主婦の母、息子が四人に、末娘の私を足した七人家族だ。いまは、二番目の兄が結婚して家を出ており、三番目と四番目の兄もそれぞれ遠くで働いているから、四人で暮らしているけど。

兄たちは全員、お父さんの会社で就職して、それなりの地位を与えられている。

近所のスイミングスクールでコーチのアルバイトをしている私とは比べられないくらい、社会的にも給料的にもきちんとしているはずだ。

年齢からいっても、結婚や孫の話はまず兄に向けてほしかった。

私の言い分を聞いたお母さんは、長男である目の前の兄ちゃんをじろりと睨む。

兄ちゃんはきょうだいのなかで一番長く両親と暮らしてきただけあって、お母さんの

視線を動じることなく受け止めた。

「自分で言うのもなんだけど、俺は細かいしうるさいから、結婚は無理だと思うな。どうしてもしろって言うなら、計算機みたいに正確ではっきりしていて、ぶれない女を連れてきてくれ」

なんだそりゃ……

兄ちゃんが理想とする女性像を初めて聞いたけど、意味がわからない。

さすがのお母さんも私と同感らしく、渋いものを食べた時のような顔で兄ちゃんを見つめて「終わってるわ」とこぼした。

兄ちゃんは私とお母さんの反応なんてどうでもいいと言わんばかりの態度で立ち上がり、無言で自分の部屋へと去っていった。

するとまたお母さんの視線が私に戻ってくる。嫌な予感に身構えたところで、玄関のほうからドアを開け閉めする派手な音が響いた。

「帰ったぞおーっ!!」

続いて届く、お父さんの野太い声。今日も上機嫌でうるさい。

すかさず、お母さんが玄関に向かっていった。

「大我、てめえ、ドアは静かに閉めろって何度言ったらわかるんだよ!? 次に壊したら小遣い全額カットだからな!」

「お、どうした? 愛しの江麻ちゃんは随分とずさんでるなあ。更年期ってやつか?」

荒々しいお母さんの叫びと、デリカシーがなさすぎるお父さんのバカっぽい発言、そして最後に爆竹が破裂したような音が聞こえる。

たぶん、キレたお母さんが手を上げたんだろう。

些細なことで揉めて、お父さんがお母さんに叩かれるのは日常茶飯事だった。

しばらくすると、私の予想を裏づけるように、左の頬を真っ赤に染めたお父さんが、ダイニングに顔を出した。

「ただいま」

「おかえりー」

私が普通に挨拶すると、お父さんは続き間になっているリビングへ移動して、ごろんとソファに寝そべった。無駄に背が高くてがっちりしているから、ひっくり返った熊みたい。

「そういうやあ、夕葵。お前、男と別れたんだってなあ」

デジャヴ……じゃなくて、ついさっきお母さんに同じことを言われたばかりだ。

いいかげん、うんざりして溜息を吐く。

「またその話!? というか、なんで、お父さんまで知ってるの……!」

「あん? そりゃあ、俺と江麻がいまもラブラブで、なんでも話し合える仲だからだ

な！」

終わった恋愛なんてとっとと忘れたいのに、どうしてうちの家族はわざわざ蒸し返すのか。

しかも、さりげなく夫婦円満を強調してくるあたりが、嫌みっぽくてムカつく。「はいはい、勝手に仲よくしてください。私は私で新しい出逢いを探すから、もう放つといてよね」

相手をするのが面倒くさくなってきた、適当にあしらった。

こういう不愉快な気分の際は、大好きなプロレスのDVDを観て、スカッとするに限る。

さっそく自分の部屋に引き籠もることに決めて立ち上がると、お父さんが慌てた様子で上半身を起こした。

「いや、待って待って。出逢いは探さなくていい！ もう見つかったるからっ」

「……はあ？」

わけがわからないことを言われ、顔をしかめる。

そうしたらお父さんはスーツの内ポケットから携帯を取り出し、私に向かって画面をかざした。

「見る！」

そう言われても、遠くてよく見えない。仕方なく近づいて覗き込むと、スーツを着た男性らしき人の写真が表示されていた。

「誰、これ？」

「イケメンだろう」

お父さんは私の質問には答えず、満足そうに微笑んでうなずいている。

しかし、画面のなかの写真はピンボケなうえにぶれていて、目と鼻と口の位置がかるうじてわかるだけだった。なんか、ハニワっぽい。

「それで？」

肯定も否定もできないまま話の先を促すと、お父さんはビシッと親指を立てて片目を瞑った。

「夕葵の見合い相手だ！」

「へえー……って、ええええーっ!!」

いきなりなにを言い出すのかと目を剥く。

すかさず、私の声を聞きつけたお母さんが、キッチンから飛んできて「うるせえ、静かにしろ！」と怒鳴った。どうやらキッチンでお父さんの夕飯の準備をしていたようだ。

実際に一番うるさいのはお母さんだけど、指摘したらひどい目に遭わされるのは間違いない。

私が口をつぐんだ隙に、お父さんは見合い相手だという男の素性を説明し始めた。「こいつはつい最近知り合ったやつなんだが、若いのにかなりのやり手だな。二年前に家業の貿易会社を継いで、どんどん事業拡大してバンバン儲けを出してんだよ。いまは二十五歳で見たとおりの二枚目、背は高えし性格も悪くねえ。俺にはちょっとばかり劣るが、有望株だぜ」

いまの話が本当なら、お父さんに劣るところなんかどこにもない。むしろパーフェクトすぎて嘘くさかった。

テーブルに料理を並べ終えたお母さんが、私と同じようにお父さんの携帯を覗き込む。お母さんは目を細めて画像を見てから、憐れみの籠もったまなざしをお父さんに向けた。

「……これ、大我が撮ったの?」

「ああ」

「次に携帯で写真を撮る時は、他のやつに頼むか、自撮りのデータを送ってもらうんだね」

お母さんの忠告の意味がわからないらしいお父さんは「ジドリってなんだ。鶏か?」と言いながら首をひねっている。ギャグなら寒いけど、本気で言っているから痛々しい。

お母さんは悲惨なものを見るように眉根を寄せて、頭を振った。

「とにかく、自分で撮るのはやめな。大我は手が大きすぎて携帯を操作するのに向いてないんだよ。相手に『自撮りで頼む』って言えば、たぶんわかってくれるから」

「なにがだよ? こいつは鶏じゃなくて、夕葵が今度見合いをする相手だぞ」
相変わらず、自撮りがなにかわかっていないお父さんは、しつこく食い下がる。お母さんは説明することを諦めたように「わかったから、早く夕飯食べなよ」と軽くあしらった。

……あれ? いつの間にか、私お見合いすることになってない!?

「ちょ、ちょっと。なんでお見合いのこと勝手に決めてるの。私、絶対に嫌だからねっ!」

私が声を張り上げて拒否すると、お父さんとお母さんは同時に溜息を吐いた。ふたりの顔には『なに言ってるんだ、こいつ』とはっきり書いてある。

お父さんは改めて自分の携帯を見直し、わけがわからないというふうに片眉を上げた。「この話のどこが不満なんだ? お前にはもったいないくらいに男だろうが」

そんな写りの悪いハニワみたいな画像を見せられて、いい男だと言われても困る。けど、相手がたとえどんな人であっても、お見合いは避けたかった。

「だって付き合う人は自分でちゃんと見極めたいし……」

それに、お見合いしただけで結婚させられそうなのも嫌だ。

相手が私を気に入る可能性は限りなく低いだろうけど、うっかり話が進んで、納得がいかないまま後戻りできなくなったら、お互いしゃれにならない。

なにがあっても断るつもりで眉間みけんに力を入れると、隣に立つお母さんが突然噴き出した。

「貧乳のくせによく言うわ。それで見極めた男ってやつに、ふられまくってるのにさあ」

「む、胸のことは関係ないから、放っておいてよつ。いつか、私を丸ごと受け止めてくれる、すごい素敵な男を見つけてやるんだから!!」

悔しくて反射的に言い返す。

そうしたらお母さんは横目で私を見て、バカにしているような半笑いを浮かべた。

「ふうん。で、いつかっていつ? それだけ自信があるなら、もう当てはあるんだろうね?」

いじわるな質問を向けられ、ぐつと言葉に詰まる。

「……そういうのは、ない、けど……。運命の相手に、きつと出逢えるはずだし!」

苦しまぎれにいい適当なことを言ってしまったけど、「運命の相手」だなんて、乙女チックすぎて自分でも引く。

笑われるのを覚悟しておおるおおる見返すと、お母さんは顎あごに指を当ててなにかを考

え込んでいた。

「まあね。確かに運命の出逢いってやつは、とんでもない時にいきなりあるもんだけどさ。アタシと大我だつて、出逢いは河川敷かせんじきで木刀ぼくとう持って睨にらみ合つてた時だからな」

「へ、へえー……」

いままで知りたいとも思わなかったけど、お父さんとお母さんの出逢いは、やっぱり普通じゃなかったらしい。

私が必要なことを考えてるなんて知らないお母さんは、ふっと肩の力を抜いて、納得したようにうなずいた。

「夕葵の考えはわかった。でも、見合いには行ってきなさい」
「ええっ」

声を上げた私の額ひたいを、お母さんが指で弾く。地味に痛い。

「いちいちギャーギャー言つて、うるさいんだよ。大我と相手の立場も考えてやりな。どうしたつて、一度は顔を見せなきゃ失礼だろ」

本音を言えば、面倒くさいし、会いたくなかった。でも、お母さんの言うことも一理いちりある。

……仕方ない。

「わかった、行く。でも、きつとうまくいかないと思うよ」

あとになって文句を言われぬように、話がまとまらない可能性が高いことを念押ししておく。

「どうやら無意識のうちに渋い顔をしていたようで、私を見たお母さんが「まあ、それでもいいよ」と言っただけで肩をすくめた。」

「ところで、大我。相手の男はなんて名前なの？」

お母さんの問いかけで、私はまだ相手の名前を聞いていなかったことに気づいた。

お父さんも言い忘れていたんだろう。ハッとして、弾かれたように顔を上げた。

「山名だ。……山名淳一」

心のなかでいま聞いた名前を繰り返す。

山名淳一さん、ね。

初めて聞いた名前だからか、自分がお見合いする相手だと言われても、全然ピンとこなかった。

2

お父さんが言うには、お見合い相手の山名さんがかなり乗り気らしい。すぐにでも私を紹介してほしいと頼まれたそう。

おかげで話を聞いてからまだ六日しか経っていないのに、本人と直接会うことになってしまった。しかも、急すぎてお父さんの都合がつかなかったため、ふたりきりで。

心の準備もなにもあったもんじゃない。いくら断ることが前提とはいえ、あんまりだ。

当然、私は文句を言ったけど、お母さんに「早く結果がわかるなら、むしろありがたいだろ」とたしなめられ、お父さんからは「それだけお前を気に入ってくれているんだ」と説得された。

確かに私だってよく思われるのは嬉しい。けど、山名さんはいままでの彼氏たちと同様に、私の写真を見て外見だけを気に入ってくれているんだろう。もしくは、お父さんの親バカな娘自慢を鵲呑みにしているか。

どちらにしても、気が重い。

私は待ち合わせ場所であるホテルのカフェで、コーヒーを飲みながら盛大に溜息を吐く。

山名さんは午前の仕事を終えてからくるそうで、少し遅れるかもしれないと連絡がきていた。

だめになる予定のお見合いのために、忙しい合間を縫って会いにきてもらうのは申し訳ない気がする。けど、私だって迷惑しているのだと開き直った。

暇を潰そうとスマホを手に取り、お気に入りプロレス団体のサイトを表示する。来週、タイトルマッチを収録したDVDがレンタル開始だと思い出したところで、お母さんからのメールが届いた。

開封してみれば、件名は『気合い入れてけ』で、内容は『もし見合い相手に失礼な態度を取って、わざと破談にしようとしたら、ぶっとばすから覚悟しておけ。親に恥をかかせるようなまねはするなよ』という恐喝まがいのものだった。

「うわー……！」

思わず、憂鬱な気持ちで声が出る。

私には最初からこのお見合いを成功させようという気がないし、正直言って、山名さんにどう思われようと構わなかった。

一応、服装だけは気を遣って、フェミニンな感じのアンサンブルにしたけど、自分の

男勝りな部分を隠したり、ごまかしたりすることはやめようと思っていた。

もう一度、さっきのメールを読み返す。

……いきなり素の性格を出したら、話が違うって思われる、よね。つまりそれは、お父さんの立場を悪くするわけで……

女性には気まぐれだとよく言うけど、うちのお母さんに限って二言はない。

いつもお父さんに向かって繰り返される容赦のない平手打ちを思い出し、私はぶるっと震えた。

痛い思いをしたくなければ、猫をかぶって、山名さんに合わせなきゃいけないということだ。

ますます気分が落ち込んでうなだれる。

次の瞬間、下を向いた視界の端が、ふいにサッとかがげった。

「失礼ですが、虎尾夕葵さんですよね？」

落ち着いた男性の声が聞こえた。

返事をするのも忘れて、声が出たほうへ顔を向ける。テーブルのすぐ横に立つ男性が、私を見下ろしてふわりと微笑んだ。

「お待たせして申し訳ありません。山名淳一です」

「え、あっ、はい。……と、虎尾夕葵ですっ」

声をかけてきたのがお見合いの相手だと知り、慌あわてて立ち上がる。額ひたいがテーブルにくっつきそうなくらい思いきり頭を下げると、優しく笑う声と共に肩にそっと手を置かれた。

「そんなにかしこまらないでください。久しぶりに会った友達のような感じで気楽にしてもらったほうが、俺も緊張しないでいられますから」

「……はい」

うなずいて、椅子いすに座り直す。気楽にしてほしいという希望に言葉では応じたけど、そのとおりにほできそうもなかった。

友達のように、なんて無理だよ。こんなイケメンの友達いないし！

心のなかで叫んで、頭をかかえる。

お父さんがお見合い相手を「二枚目」で「背が高い」と言っていたのは本当だったらいい。あのハニワみたいな写真からは想像できないほど、山名さんは整った容姿をしていた。

中性的でスッキリした顔立ちに、意思の強そうなまなざしが精悍せいけんさを足している。もともと色素が薄いのか、淡い茶色の髪に、チョコレート色の瞳をしているため、外国人の美青年のような雰囲気だった。

さつき見上げた時、かなり首を反そらさないといけなかったから、身長は一八〇センチ

を超えているはず。すらりとした細身の身体に、深いネイビーのスーツがよく似合っている。私に向かいの席に座った山名さんは、どこか遠くを見るように目を細めて、ほうっと息を吐く。

「やっと……会えた」

「え？」

彼の口から漏れたささやきに首をひねる。

お見合いの話が持ち上がってから、今日で六日。まだ一週間にもならないのに、「やっと」と言うのは少しおかしい気がした。

私の視線を受け止めた山名さんは、なにかを取り繕つくろうように笑った。

「実はね、今回の件は俺が夕葵さんを紹介してほしくて、あなたのお父様に無理を言ってお願ねがいしたんです」

寝耳ねみみに水な話を向けられ、ぱちぱちとまばたきを繰り返す。

「このお見合いはうちのお父さんが仕組んだものだと思っただけで、違ちがうらしい。」

「そうだったんですか。でも、どうして……」

山名さんはここにこしながら、満足そうにうなずいた。

「もちろん、あなたと親おやしくなりたいたいからです。できれば、結婚を前提として」

コーヒーを嘔きそうになり、思わず咳き込んだ。
け、結婚って！

最初から決定的な言葉を出され、山名さんを凝視した。

見るからにイケメンでモテそうな彼が、なぜ私を気に入ったのかはわからない。けど、向けられる熱っぽいまなざしが本気だと物語っている。

どうしよう。まさか相手がこんなに押しにくるとは思っていなかった……！
まずい事態だと気づいて動揺する。

のらりくらりとこの場をかわして、あとでお父さんから断ってもらえばいいと考えていた。だけど、この調子では話を合わせていたら引き返せなくなりそうだ。

いくらなんでも、この場ではつきり「お断りします」とは言いにくい。しかし、素の自分を見せて断られるように仕向けたら、お母さんの制裁が待っている……

「あ、あのう。ええと、お気持ちありがとうございますんですけど、すぐには決められないと言いますか。まだ、お互いのことをよく知らないですし。そういうのはもつと時間をかけて、理解してからでない」と――

言葉を尽くすけど、彼は落ち着いた様子でゆっくりと首をかしげた。

「俺はあなたのことをよく知っています。結婚生活がうまくいくという確信もありますよ……」

なんでそういう根拠のない自信を持つてるわけ！

心のなかで文句を言って、じつりと睨む。

山名さんは思い込みが激しくて、面倒くさい人なのかもしれない。そんな男と結婚するなんて、ごめんだ。

「……で、でも、私と山名さんは初対面でしょう？ 結婚は一生を左右するとても大事なことなので、じっくりと考えて決めたいです」

苦しまぎれに、返事を先延ばしにする。

山名さんは私の答えに少し目を瞠ったあと、どこか寂しそうに苦笑いした。

「そうですね。ではお互いを知るために、別の場所へ行きましょう」
「はい？」

どういうことかと聞き返す前に、山名さんが私の手を握って立ち上がる。つられて立った私は、引きずられるようにしてカフェの外へ連れ出された。

「えっ、どこに!?」というか、コーヒーのお金が……」

ほとんど無理矢理引つ張られてきたから、コーヒーの代金を支払っていない。無銭飲食をするわけにはいかないと思いを上げると、山名さんが振り返って微笑んだ。

「先に払っておいたから、大丈夫です」

「あ、すみません。ありがとうございます」

……とか、普通にお礼を言ってる場合じゃないって！
ハッと我に返った時には、もう遅い。私は山名さんに導かれるままエレベーターに乗り込み、上昇していく籠のなかで、呆然とするしかなかった。

ホテルの上階に連れていかれるなんて、嫌な予感しかない。

もし不埒なまねをされそうになったらぶん殴って逃げよう。そう思い、こぶしを固めていたけど、山名さんが向かったのは、パーティー用フロアに併設された広い空中庭園だった。

そこは建物の一部を切り取ったような造りになっていた。天井までかなり高いため開放感があり、春の穏やかな風が抜けていく。時折どこから小鳥のさえずりも聞こえる。本来はガーデンウエディングのための場所なのか、綺麗に刈り込まれた木々が並び、季節の花が脇を彩る小道の奥には、小さな噴水と、ハートをモチーフにした洋風の鐘が設置されていた。

可愛いものにあまり興味が無い私でも、雰囲気のある景色に見入ってしまう。

「素敵」

思わず感嘆の溜息をこぼす。すると山名さんは繋いだままの手にキュッと力を込めて、嬉しそうに笑った。

「なかなかいいでしょう。以前、知人の結婚式に呼ばれてここへきたのですが、素朴なところが気に入ってしまっ。いつか好きな人を連れてきたいと思っってたんです」

「え？」

さりげなく出た「好きな人」という単語に驚いて、山名さんを見上げる。彼は表情を変えずに、そっとうなずいた。

「夕葵さんのことですよ」

まっすぐな感情表現に、思わずどくんと心臓が跳ねる。

スマートでおしゃれな山名さんは、筋肉ムキムキの強い男性に憧れている私のタイプではないけど、好きだと言われればドキドキしてしまう。

まあ、会ったばかりで「好き」とか調子がよすぎると思わないでもないけど。

「……ありがとうございます」

曖昧に微笑んで、一応お礼を言っておく。

山名さんはなにか気になるものでも見つけたように、まじまじと私の顔を覗き込んでから、自分の頬を指差した。

「夕葵さんのここに、すごくはつきり『嘘くさい』って書いてあります」

「えっ!？」

とっさに身を引いて、空いているほうの手で頬を押さえる。

驚く私を見た山名さんは、パツと破顔はがんした。からかわれたのは悔くやしいし、本心を言い当てられたのは恥はずかしい。ムカムカして睨にらむと、彼はまぶしいものを見るように目を細めた。

「すみません、怒らせたかったわけじゃないんです。ただ、あなたが俺の前において、笑ったり、驚いたりしているなんて、夢のようで。……ずっと、会いたいと思いつつ、会いたかったですから」

会ってすぐに感じた違和感を、また覚える。山名さんの口ぶりは、まるで私のことをかなり前から見知っていたかのようだ。

「ずっと？ あの、私たち今日初めてお会いしたんですよね？」

私の疑問に、彼はゆっくりと頭を横に振った。

「いえ、以前にも何度か会っているんですよ。といっても、言葉を交わしたのはわずかな時間でしたし、あとは俺があなたを一方的にお見かけしただけですけど」

予想外な話を聞かされ、目を瞠みはる。どういう状況だったのかはわからないけど「何度か会っている」という相手をまったく覚えていないのは、あまりにも失礼だ。

「そ、そうだったんですか。申し訳ありません、私、全然覚えていなくて……」

ごまかすこともできずに、うなだれる。

けれど山名さんは穏やかな表情で、また首を横に振った。

「いいんです。気にしないでください。本当にたわいない話をしただけだったので、夕葵さんが覚えていなくても無理はありませんよ」

「でも……」

なんとか思い出せないかと記憶をたどってみるけど、全然だめだ。

お父さんの仕事の関係で会ったの？

しかし、私は兄ちゃんたちと違って、いままでほとんど家業にかかわってこなかった。当然、お父さんの会社の関係者なんて覚えていない。

そもそも、土木工事を主に請け負おっているうちの建設会社と、山名さんが経営しているらしい貿易会社に接点なんてあるものだろうか。

「ごめんなさい。やっぱり思い出せません。失礼ですけど、どこでお会いしていたのか教えてくださいませんか？」

首を横に振って、白旗を揚あげる。簡単に諦あきらめるのは性に合あわないけど、仕方ない。

山名さんはなにかを考え込むように難しい顔をしてから、ニコツと笑みを浮かべた。

「秘密にしておきます」

「へ？」

「……というより、忘れたままでいてほしいのが本音かな。夕葵さんと初めて会った時の俺は、すごく格好悪い男だったの」

意外な拒絶にあい、ぼかんとして山名さんを見つめる。

こんなに見た目が整っているのに、格好悪くなることがあるだろうか。もし着古したよれよれのTシャツを着ていたとしても、彼なら様になりそうだけど……それに、隠されるとなおさら暴きたくなってしまふものだ。

「そういうふうには言われたら、かえって気になります」
 納得しきれずに眉根を寄せて食い下がると、山名さんは困り顔で微笑んだ。

「いっしょにいるうちに、わかると思いますよ。……でも、いまはまだ内緒にさせてください。再会したばかりなので、みつともないところは見せたくないんです」

あとでわかるのなら、いまずぐ教えてくれてもいいのに、彼はそれ以上のことを言う気がないようだ。イケメンゆえのこだわりだろうか。

本当はしつこく問い詰めて吐かせてしまいたい。どんなことだろうと、はつきりしないのはイライラする。

でも、さつき届いたお母さんからのメールが脳裏にちらついて、結局はなにもできなかった。

「山名さんなら、どんな姿でもみつともなくなることはないでしょう。そんなに格好いいんだし、自信持っていていいと思いますけど？」

呆れ混じりに溜息を吐く。

すると山名さんは私を見つめたまま、ものすごく驚いた顔をしていた。

え……。突然どうしたんだろう。私、なにか余計なことをした？

内心焦りまくって、自分の行動を振り返る。少しして、さつきの発言が嫌みっぽく聞こえたかもしれないと気づいた。

「いや、あの、私はただ思ったことを言っただけで、嫌みとかじゃ……」

「本当ですか？」

「はい？」

なにを聞かれたのかわからずに呆然と見上げると、山名さんは顔がくっつきそうほど身を乗り出し、真剣な表情で私を見返してきた。

「本当に、俺のことを格好いいと思ってくれている？」

重ねて問われても意味不明だ。私はなにか混乱しながらうなずいた。

「格好いい、です。イケメンだし、背が高いし、センスもいいし」

私の答えを聞いた山名さんは、一瞬、苦しそうにくしゃりと顔を歪めた。直後、私と繋いでいないほうの腕を伸ばして抱きついてきた。

「あー、どうしよう。まずい、すごく嬉しい……!」

「ちよ、ちよっ……え、なに——!？」

とっさに、繋いでいた手を振り払う。彼を押しつけるつもりだったのに、逆に両手で

思いきり抱き締められてしまった。

いきなりハグしてくるなんて、信じられない。しかもすごい力だ。なんとか逃れようと身をよじるけど、彼の腕は少しもゆるまなかった。……あ、筋肉けっこう硬い。

触れている二の腕と、胸板の感触にくらくらしてくる。細身だからわかりにくいけど、山名さんは、かなり身体を鍛えているんだらう。

勝手に胸が高鳴る。こんな時まで筋肉好きの癖が出てくるなんて、自分でもげんなりした。

山名さんは私の髪に頬ずりをして、感極まったように吐息をこぼす。

「ずっと、きみに認められなかった。もう格好悪いなんて言われないように、きちんとした姿で会いたくて、強くなったところを見せたくて……」

すっかり自分の世界に入っちゃってるらしい彼は、敬語も忘れて、私に対する感情を垂れ流している。

それにしても、私と山名さんの最初の出逢いは、あまりいいものではなかったようだ。いまの言葉が本当なら、私は彼を「格好悪い」と評価したっぽいし……

そんな失礼なことを言った記憶はないけど、酔っていた時ならわからない。たとえ呑み会の帰り道で、イケてなかった頃の山名さんに遭遇した可能性がないとは言えな

かった。

抵抗するのも忘れて、彼のことを考える。

どこかで私に酷評された山名さんは、怒るとか無視するとかすればいいのに、わざわざ自分を磨いてまで追いかけてきたようだ。

それってなんか、ものすごく気に入られてる、かも……？

あまりにも情熱的な彼の行動に、思わず頬が火照った。何度も恋愛に失敗していて、流されるのがよくないとわかっていても、ドキドキが止まらなくなる。

やがて山名さんは長い溜息を吐いてから、そっと腕を離れた。

「ごめん。びっくりさせてしまったね」

自分の世界から戻ってきた山名さんは、すまなそうに眉を下げている。

私はブルブルと首を横に振った。彼の気持ちを知って照れただけで、嫌ではないから。

「驚いたけど、平気です」

「よかった。ところで、いまからはもっと砕けた話し方にしないかい？ さっきも言っ

たけど、俺はきみに近づきたいし、気を遣ってほしくないんだ」

色々とカミングアウトしたせいかな、山名さんはすっきりした顔で微笑む。

私も敬語で話すのはあまり得意じゃないから、うなずいた。

「はい。あ……うん」

返事を言い直して笑い合う。急に彼との距離が縮まった気がして、なんだか嬉しくなった。

改めて自分の流されやすさに驚くし、山名さんが細マッチョだと気づいた途端に見る目を変えた現金さには呆れてしまうけど。筋肉の魅力には抗えない。

山名さんはまた私の手を握ってくる。

「もし、きみが嫌じゃなければ、夕葵って呼びたい。俺のことも下の名前で呼んで？」
もちろん大丈夫だと首を縦に振る。でも、山名さんのことを呼び捨てにするのはためらう。

今日会ってすぐに馴れ馴れしくしたら、お母さんに「生意気で失礼だ」と指摘されるかもしれないから。

その昔、ヤンキー仲間で作ったチームとやりに属していたお母さんは、礼儀とか、上下関係にひどくうるさいのだ。

「えーと、じゃあ、淳さんって呼んでもいい？」

「いいよ」

私の提案に、淳さんにはっこりと笑った。

小鳥のさえずりが聞こえるガーデンテラスに、気持ちのいい風が吹き抜けていく。
さやさやと揺れる草木のなかで見つめ合い、ほのぼのしていると、私のスマートフォ

ンがけたたましく鳴り始めた。

「あっ、ごめん。すぐ止めるから」

マナーモードにするのをすっかり忘れていたらしい。音を止めようとバッグからスマホを出したところで、淳さんに腕を押さえられた。

「いや、気にしないで。急用かもしれないし、ちゃんと確認したほうがいい」

「うん。ありがとう」

お礼を言っ、スマホのロックを解除する。待ち受け画面を表示させると、自宅にいるはずの兄ちゃんからメールがきていた。

そこに書かれていたのは『エマーゼンシー 総員退避せよ』という文章だけ。同じメッセージがきょうだい全員に一斉送信されていると知り、焦った。

「う、嘘でしょ!？」

思わず叫び声を上げる。

知らない人が見たら、ふざけているとしか思えないこの『エマーゼンシー』という通知は、虎尾家のきょうだい間で使われている隠語だ。その意味は「両親の夫婦ゲンカが始まったから、痛い目に遭いたくなければ、しばらく帰ってくるな」という警告。

力強くて豪快だけど、かなり鈍くてちよつとずれてるお父さんは、滅多なことでは怒らない。完全にお母さんの尻に敷かれているから、口汚く罵倒されてもぶたれても、普

立ち読みサンプル はここまで